

男性（50代）禁煙年齢・50代

朝の歯磨きの時、何度も込み上げる胃のむかつき。前触れもなく出る、嫌な痰。どこかで見た黒黴の生えたタラコのような、タール漬けの肺の写真が浮かぶ。よし、今日こそ禁煙だ。しかし職場への行きがけ、自販機のわきで、当然のようにタバコに火を点ける。

これが美味い。いや、正直なところ、さほど美味しくはない。ニコチン中毒を自認することも疲れ、私は早くタバコを止めたいと思うようになっていた。

そんなある日、私はタバコを始めた理由に思い当たった。仲間に勧められてとか、何と無くとか人は答えるだろうが、自分を格好良く見せたかったからではないのか、と。

少なくとも私の場合はそうだった。喫煙はもう子供でないことを意味し、『カッコイイ大人の自分』には不可欠のものだった。大人の自分のカッコ良さに酔うためならば、本当は嫌な臭いも口の中のいがらっぽさも、さらには法律違反のやましさもなんのその、また一本口にくわえ、うーん、決まっているぜ、と一服。それがついには習慣になって、今に至ってしまったのだ。

言うならば、喫煙者は、そもそもナルシストである。ニコチン中毒にかかるより先に、自ら描いた自分のカッコ良さに中毒していたのだ。この大発見？の上に立てば、禁煙法は明らかだった。『タバコを吸っている俺ってカッコイイ』という自惚れに水を差せばいいのだ。

私は鏡を見た。腫れぼったい目蓋。濁った目。しみの浮いた額や頬。口を開ければ、お世辞にもきれいとは言い難い歯並びと、歯の色。どこから見ても、くたびれた中年の顔である。

若い頃は少しはましだったとしても、ナルシストの条件にはほど遠い顔で、自分に酔いながらタバコを吸っていたなんて、おぞましくも愚かな道化と言うしかなかった。思い返せば、煙を燻らす自分を認めて、ああステキとか言ってくれた人は皆無である。それなのに、いや、それゆえにと言うべきか、眉根に皺を寄せたり、遠い目をしたりして煙を吐いて、女性の前で、職場で家庭で、そして一人の時でさえ、ポーズをつけて、秘かに悦にいていたのだ。ああ、

気持ちわる。

いささかマゾ的な自己診断を私は素直に受け入れた。自分の事ゆえ、当たっていたからだ。そして、愚かな自惚れを続けることはオノレの恥なのだと、タバコを吸いたくなるたびに自分に言い聞かせた。

もちろん、すんなりとは行かなかった。寝る前の、一日の終わりの一服。この誘惑に抗し切れなかった。そこで、いいだろうということにした。ただし、鏡の前でなら、という条件付きである。我と我が眼で間近に見ると、喫煙という行為の醜さは、まさしく一目瞭然である。嫌らしい唇に妙なものを挟みこんで、臭い煙を鼻の穴から出すなんて、人としてすることではない、と実感する。タバコなんてもうよそう。人間だもの、と自分を励ます。

職場でどうにも我慢ができなくなると、貰って吸った。小さな手鏡を手のひらに隠して、である。禁煙はなかなか、などと言って、気心が知れた同僚の間で一服するのは悪くはなかった。しかし歯を覗き舌を見ると、吸い続ける気は失せる。さあ、お茶でも飲もうや。喫煙室から自分を連れ出す。

酒場が一番危険な場所だった。タバコ無しで、どうやって男がカウンターでサマになるというのか？指を二本少し動かすだけで、黙ってママが火まで点けてくれるのに！煙を吸い込むと、文字通り頭がくらくらするほどの至福の時だが、途中でトイレに立った。鏡を見て、自分に問いかけるのだ。今タバコを吸っていた俺は格好が良いか？答えは、ノーである。酔っているこの顔自体が見られたもんじゃないのに、馬鹿なことを訊くな。そう来るから、ごめん、怒らせてわるかった。もう遅いし、帰ろうや、と応じる。

禁煙が軌道に乗ってから、夢でタバコを吸うことがある。ああ、また吸ってしまったと嘆いて目が覚め、夢でよかったと安堵する。これは良い。怖いのは、喫煙の夢を見て、俺は本当にだめな奴だという絶望感に捕えられる時だ。禁断症状なのだろうか、夢と言うには妙にリアルで、仕事に行きたくないほどの脱力感を伴うことがあるので、注意して対処しなければならない。

どうやって？なあに、鏡を見るのだ。おい、喜べよ。これはニコチンが体から出尽くす時の反応さ。ほら、もうゲーゲーしないから、丁寧に歯が磨けるし、口臭も消えるというものだ。クリーンになれば男ぶりも少しは上がる、いや、最近ちょっと上がったんじゃないか。お世辞じゃないよ。鏡、よく見てみるよ。